

道路に沿って大きく拡大している。又、都心部の再開発事業を機に、業務地区化、商業地区化と、機能分化のきざしが現れている。

都市機能：情報文化・業務管理機能などは、県都として充実している。しかし商業機能においては、機能の相対的な低下がみられる。これは松江の東西に位置する米子、出雲の商業機能が充実してきたためである。通勤圏をみても、米子・出雲の影響で、松江の通勤圏は東西に狭くなっている。松江は米子・出雲にはさまれ、都市の勢力が伸び悩んでいる。そのため、島根県東部・出雲地方の一地方都市の域を出ていない。ゆえに他の県庁所在地にみられるような急激な人口増加がないといえる。

地域構造：機能別土地利用概況図の作成から、機能別に地域が未分化であることがわかった。その理由として、市街地が南北に分断されているため、都市の強力な核となるものを欠き、そのため、事務所、官公署などが分散的に配置された。又、経済基盤の弱い県の県都として都市の活動が今まで不活発であったことが考えられる。機能別に地域が未分化であるために、都市機能が充分発揮できない。これは、松江市の商業機能が低下している遠因ともなっている。

三里浜砂丘地域の農業

河 合 みゆき

三里浜砂丘地域には、全国の80%の生産を誇る特産物“花ラッキョウ”がある。この花ラッキョウ栽培の立地要因を探ってみると、砂丘地という特性を十分に生かしている事がわかる。まず自然条件から見ると、砂丘地は地力不足であり乏水性である。よって、そこで栽培し得る作物も自ずと限定されるが、ラッキョウは元来塩害、風害、乾燥害に対して強く、吸肥力も強い作物であるため、数少ない無漑水作物として砂丘地に好適である。又、生産されるラッキョウの品質面から見ても、地力不足である砂丘地での栽培は小粒を生産する事になり、分球肥大するにつれて露出し、緑化する事を飛砂により防止できるので色の白いラッキョウが収穫できる事になる。一方、人文条件からみると、一般に商品作物は全国的需要供給の変化を受け易いが、ラッキョウは生物ではなく漬物であるため価格の安定がある。そのため、生産者は“米の代わりにラッキョウ意識”を持っている。又、三里浜砂丘地域のラッキョウはラクダ系福井在来種の、当地独特の二年掘り栽培により、品質面では独占的であり、集荷・製造・加工・販売の一元化を行なっている三里浜特産農協があって、商業ルートも確立されている。それらにより、ラッキョウに関しては産地指導型の価格形成ができ、農家自身が計画生産できるという長所がある。

ところで、三里浜砂丘地域の開発は、このラッキョウの生産拡大による農業開発により始まった。それ以前は、砂丘後背水田や集落に対する飛砂の害が著しく、それを防ぐ砂丘の固定化が進められており、砂丘地自体の利用はなされていなかった。そして、代表的な“出稼ぎ・行商の供給圏”となっており、川西地方の中でも第2種兼業化が最も進んでいる地域であった。しかし、砂丘地農業としてのラッキョウ栽培が盛んになるに従って、砂丘上の保安林は次々と伐採され、川西地方の中でも最も農家一戸当たり経営耕地面積が大きく、然も裕福な地域となり、従って第2種兼業化の最も進んでい

ない地域に成長した。

しかし、近年の“ディスカバー日本海”をキャッチフレーズとする多くの日本海側海岸砂丘の港湾化及び工業開発の波は三里浜砂丘地域にも及び、福井臨海工業地帯が現在造成されつつある。これにより、三里浜砂丘地域の農業生産基盤である畑地が約半分に減少してしまうことになる。それに対しては水田転換が行なわれ、工業開発以前の畑地率60%を保つこととなっており、畑地率7%という福井県においてやはり重要な畑作地域である。しかし経営耕地総面積は34%も減少することになるため、その減少した耕地では、より高度な土地利用を目指した集約農業が行なわれ始めた。今後とも諸施設が整えられた耕地で、より高度利用を目指す努力が続けられる必要があろう。

最後に工業開発についてであるが、最近の経済が低成長時代に入ったため工場誘致が進まず、現在先行き不安がある。そのため、元々越前加賀国定公園の一部であることを利用した観光開発への転換等の案も出されており、目下方針再吟味がなされている最中である。今後、ますます変貌してゆくとあろう三里浜砂丘地域を注目してゆきたい。

安八郡輪中地域における 町村境界線の意味について

河 合 令 子

安八郡の輪中地域は、西側を揖斐川、東側を長良川によってはさまれた洪水頻発地帯である。この安八郡輪中地域において、明治以後、進められた未作られた町村境界線が、住民とどのような関係を持つかを明らかにすることが、本論文の目的であった。

第一章においては、この地域を含む輪中地域全体について、その自然条件の上から洪水の起こりやすい理由を考察した。

第二章においては、上記のような自然条件に対する住民の工夫と努力の結果として作られた輪中について、治水の歴史と共に、どのような発達過程をたどってきたかを、歴史的に述べた。

第三章においては、政府の意向によってなされた、町村合併の過程と、それが、具体的に、この地域においてどのように施行されたかを述べた。

第四章においては、ここに居住する住民がこの町村境界線をどのようにとらえているかを、意識調査、具体的には、1人でも多くの人達に会う事を目的としたインタビュー調査によって明らかにし、又ここに居住する住民の生活様式と町村境界線については、農業集落カードによる指標を選び、それを基礎にして、区分をすることにより、町村境界線と対比して考察した。

これらの結果、町村境界線は、この地域の住民にとって意識の上ではなんら大きな意味を持たないということ、町名の地名に対する意識は、単なる記号的なものとして現住民にはとらえられている傾向が強いこと、町村合併の境界線変更の際には、これらの無関心層を、一部の積極的意見を持つものが、指導する形で行なわれたこと、そして、やはり、町村合併等に積極的意見を持っていた者は、地名に対する意識が高く、プライドや愛着心を持っていること等がわかった。